

長い谷間

椎名麟三

講談社



なが たに ま
長い谷間



昭和36年5月30日 第1刷發行

著者 椎 名 麟 三
¥ 340 發行者 野 間 省 一
印刷所 慶昌堂印刷株式會社
(製本 黒柳)

發行所 東京都文京區 株式 講 談 社
音羽町3-19 會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

© Rinzo Shiina 1961 PRINTED IN JAPAN

長い谷間

装
幀
麻
生
三
郎

たすけてくれ！ 私は、自分の聲におどろいて、寢床から上半身を起す。アパートのなかには、しんとしずまりかえつていて、外には雨の音が聞えているだけだ。私は、かすかに安堵する。全くこんな恥しい叫び聲なんか、誰にも聞かれたくなかつたからだ。枕元の目覺し時計を見た。まだ三時だつた。店から歸つて來て、寢床へ入つてから、まだ一時間ほどこしか立つていない。

私はふたたび蒲團のなかにもぐり込んだ。十ワットに切り換えた親子電球のにぶい光が、汚ない古びた部屋をぼんやり照し出している。煤けた天井には、もう數年越しの蜘蛛の巢が、あちこちに不精たらしくぶら下つている。もちろん不精なのは、私の方なのだ。このアパートにだつて、年に二回は區役所から大掃除の通知はやつて來ていたからだ。しかし私は、一度もそれをやつたことがない。たしかに私は、不精者なのだ。しかしそんなことは、とり立てていうに値することだろうか。

私は、明日のために眠ろうとする。私は、二十六歳になつたばかりの、小さなスタンド・バアのバーテンダーなのだ。本店は、兩國の方にあつて、この平井の方の支店は、私にまかされているのである。しかも私は、自分でいうのもおかしいが、責任感のある男なのだ。私は自分の仕事をおろそかにしたことはない。しかも希望だつて人並みにちやんともっている。どこかに小さなスタンド・バアの店をもつことが私の希望なのだ。そのための貯金だつて、自分のわずかな給料をさいて毎月ちやんと積み立てている。それなのに、理由もないのに一年ほど前からあの恥しい考えが、私の脳髓のひだへしみついてしまつてゐるのだ。それは、この地球にもやがて終末がやつて來るといふ考えなのだ。私の終末さえも耐えがたいのに、その上にこの地球がほろんでしまうといふことにどうして耐えられるだろうか。全くどうしてこの世界が、こんなふうになつてゐるのか、私には全くわけがわからない。しかしまだ結婚もしていない、名もないバーテンダーにすぎない男が、こんな妄想に魅入られてゐるなんていふことは、少女へのいたずらを考へてゐる變質者以上にいやらしい男であることはたしかなのである。全くこんな私は、決して人に知られてはならないことなのだ。

私は、起き上つて、机の抽出しをあげ、バラミンをとり出す。藥罐からサイダー・グラスへ

わずかに水を入れ、そのなかへ大きな白いその錠剤を二個落す。それは水のなかでたちまち崩壊しはじめる。いまのところ私には、この睡眠薬が一番調子がいい。私は、その錠剤のすつかりこわれるのを待つて、一気に咽喉へそそぎ込む。だが、いつものようにコップのガラスの壁に、錠剤の残りが、白くざらざらした感じで残っている。私は、そのグラスへふたたび水を入れて丁寧にすぎ、ふたたびそれを咽喉へそそぎ込む。私だつて、こんな恥しい自分に對してはたたかわなくてはならないのだ。

雨が、ますますはげしく降っている。またこのあたりは、水が出るだろう。私は、暗い電燈を見ながら、何かを待つている。やがて私の意識がぐらぐらと揺れはじめ、これで眠れるというやさしげな豫感がしはじめる。朝になりさえすればと私は考える。朝になりさえすれば……。

私は、いつものように九時すぎに眼をさました。私は、自分の部屋を出て、顔を洗いに流しへ行つた。隣りの部屋の主婦が、あわてて流し元からはなれた。人に見られてはならないものを洗濯していたらしいのだ。彼女は、底の浅いアルマイトの洗面器のなかへ、そのしぼりの足りない白い布をかくすようにしてもつていた。ズロースらしかった。私は、その布に氣がつか

ない顔で愛想よくいつた

「お早うございます」

私の夜を人々の間にもたらさないこと、それが人々と自分自身に対する責任であつたからだ。だが、彼女は仕方なさそうに答えていたのであつた。

「お早うございます」

それから彼女は、自分の部屋へ逃げるように入つて行つた。彼女は、市田鐵工の勞務係長の池田茂雄の妻だつた。まだ若く、私より一つか二つ年上にすぎない。だが、どうしてか彼女はこのアパートの人々の眼から逃げまわつてゐる。威張ろうと思えば威張れるのだ。このアパートには、彼女の夫より社會的な地位の高いものはいないからである。だが、去年の暮の市田鐵工の賃上げストが、少くともこのアパートのなかでは、彼女をひとりぼつちにしてしまつてゐるのだ。このアパートには、彼女の夫を敵側の人間としてたたかつた市田鐵工の従業員が、五世帯もいたからだ。

私は、顔を洗うと、玄關に近い方の部屋の戸をあけた。その四疊半の部屋には、私の両親がゐるのである。つまり私は、二部屋借りてゐるのだ。父は、小さな机の前にきちんと正坐して

マツチの箱張りをやつていた。バアの廣告マツチのそれで、他のマツチより率がいいのだ。十個張つて、七圓になる。父一人で一日に百五十圓は張つた。私は、猫背の低い男であるが、父は、やせているが、背が高かつた。だから正坐していると、背はしやんとしているし、なかなか立派だつた。父は、私鐵の運轉手だつた。一時は、組合の役員になり、私鐵の全國大會で、議長團の一人にえらばれたことさえあつた。しかし昭和二十五年のレッド・パージで職を失つてから、保險の外交やら倉庫の番人をやつたりしていたが、いずれも長つづきはしなかつた。そして五年前、私たちはこのアパートへやつて來たのだが、人間的にも父はすっかり覇氣を失つてしまつたようだつた。父は、一日中部屋へとじこもつていて、外にさえあまり出なかつた。また、誰一人、彼をたずねて來る者もなくなつていた。私は、去年このアパートに一部屋空いたのを幸いに、その父から獨立したのである。私は、兩親にさえ私の恥しい祕密を知られなくなつたからだ。――父の張つたマツチを墓座の上へひろげていた母は、私を見ると、急いでせまい臺所へ立つた。

「今朝、數枝さんが來たよ」と母はいつた、「へんな帽子をかぶつていたよ」

「ベレー帽だろ」と私は答えた、「昨日、店へも來やがつたんだ」

父は、ただだまつて、馴れた手付きでマッチの箱を張りつづけていた。父には、もう彼自身の意見さえもつことはできなくなつていた。その五分刈の頭は、まだ五十にもならないのに、ほとんど白くなつていた。母はいった。

「味噌汁とおしんこだけけど、いいだろ？」

私は、自分の部屋へかえつた。母は、追つかけるようにして食事を私の部屋へ運んで來た。

私は、その母へ千圓札を三枚わたした。私は、一月九千圓、兩親へわたすことにしていたのだ。もちろん私の賄料をふくめてだ。しかも私は別に一月に一萬圓は、銀行へ積み立てていた。數枝が昨夜店へあらわれたのは、そのことを知つていたからだ。つまり彼女は、またもや私に金を借りに來たのである。だが、私には、彼女へ金を貸してやる義理はなかつた。彼女は、私が兩國の本店で、バーテンダーの見習をやつてるとき、よくその店へひとりで飲みに來た女だつた。身體つきのずんぐりしている見榮えのしない女で、店の私たちの仲間からも毛嫌いされてゐた。妙に氣どつたところがあり、いつもむつかしげな本を小脇にかかえていたからである。だが、彼女は、私たちの店の名前の「あかつき」を漢字で書けなかつたのだ。もちろん私たちは——バーテンダーは見習の私を入れて三人いたのだが——その彼女を笑ひもしなかつた。彼

女が、錦糸町の支那そば屋の女店員であることを知っていたからだつた。だが、彼女は、そんなことも知らないで、神田の出版社にとめているといつていた。彼女に、そんな嘘のつづけられたのは、マスターが、彼女の素姓をばらすことを私たちに禁じたからだつた。マスターは私より一つ年下の二十五だつたが、商賣熱心の眞面目な男で、六年ほどで、本店を改築して大きくしただけでなく、平井へいまの支店を出したくらいだつた。まだ、獨身で、銀座へ店を出すまでは結婚しないつもりのもりようであつた。私は、このマスターを愛していた。だが、このマスターさえ、私が數枝と一緒になつたことも、また一月もたたないあいだに彼女が私から去つて行つたことも、いまだに理解できないのである。しかしそんなことはどうでもいいことなのだ。ただ彼女は、私に満足できなかったというだけだからだ。

だが、昨夜、降りはじめた雨のなかを店へやつて來た數枝は、全く悄然としていた。風のたよりに彼女が、やつとほんとに出版社へつとめていると聞いてはいたが、その出版社がつぶれてしまつたというのだ。その彼女は、まるで畫描きのような恰好をしていた。赤いベレー帽をかぶり、スケッチ・ブックのようなものさえもつていたからである。そして自分は、いま畫をならつてゐるのだといつて、私の知らない、しかし有名ならしい人の名前を彼女の知合いとして

ならべ立てた。

「君は、何のために晝なんかないはじめたんだ」と私はたずねた。

すると彼女の隣に腰を下していた客が、その彼女へとりなした。

「バーテンさん、晝というものは、何のためにつてやるもんじやないんだよ」

數枝は、得意そうな顔になつて、その客とビールで乾杯した。私は、私と一緒にその支店をやつてゐるマスターの従妹の榮子へいつた。

「あの女のお客さんへ出したビール、ちゃんと傳票へついているね？」

榮子は、私を意味ありげに見ながら、につと笑つた。それからカウンターのかけへ背をまるめながら、傳票へビールを記入した。彼女は、私が數枝からまたもや金をしぼられるにちがいないということを知つていたのだつた。

雨はもうやんでいたが、通りには案の定水が出ていた。私は、ゴム長をはいて、その水のかを歩いて行つた。そして驛への通りを店の方へ曲ろうとしたとき、角の煙草屋の老婆が、私へ聲をかけた。

「大塚さん、ちよつと雨が降ると、すぐこれなんだからね」

私は、ぺこりと頭をさげながら愛想よくいつた。

「いや、全くですよ」

老婆は、それへ答えた。

「ほんとにねえ」

水は、そのあたりの舗道の上にも、十四、五センチの深さで蔽っていた。それは動きさえ見せず、あるひろびろした感じを街のなかへあたえていた。だが、ブリキの金だらいを浮べながら遊んでいる子供たちも通行人たちもこんな水には馴れ切っている感じだ。街の家並の間から驛舎の黒い屋根が見えた。高架の驛だからだ。それらの屋根の上に、まだくもつている空が重そうに垂れている。といつて、全く何ということもないのだ。自轉車が、私を追い抜いて行つた。重そうに水を切つて行くその後輪のタイヤが、力なく水を後へふりとばしていた。やがてそれでも水は切れ、そこからアスファルトの黒い舗道が這い上つていた。そしてその水際だけ、水はかすかな動きを見せて、さざなみさえ打つていた。板や藁くずが、小さく揺れ、まるで水が呼吸でもしているようだった。

店の前に、數枝が立つていた。時計を見た。十時半だった。約束におくれたわけではなかったのだ。彼女は、細いチェック縞のビニールのレインコートを着ていて、昨日と同じ赤いベレー帽をかむつていた。そのベレー帽は、顔の丸い彼女には、どうも似合わない感じた。彼女は私を見るといつた。

「朝、ちよつとあんたのアパートへ寄つたのよ。お金、もつて来てくれた？」

私は、上衣のポケットからハトロンの封筒をとり出した。彼女は、それを受取ると、その封筒の表に書かれた五千圓という數字を見ながらひるんだ笑いを見せた。

「相變らずちやんとしてるわね」

「そうだよ、ちやんとしてるよ」

「ほんとは、わたし、昨日話した部屋代や借金のほかに、もう少しいるんだけど」

「だめだよ」と私はいつた。

私は、店のドアの鍵をあけてなかへ入つた。なかは、眞暗でしめつぽい。私は、カウンターのなかへ入り、電燈のスイッチを入れた。數枝は、高い椅子へよじ上るようにして腰を下し、カウンターへ肘をついた。

「ほんとに、わたし……」と彼女はいつた。

私は、ふたたびにべもなく繰り返した。

「だめだよ」

數枝は、ふたたびひるんだ笑いを見せた。

「ほんとにだめ？」

「おれは眞面目に働いてるんだ」と私は思わずはげしくいつた、「眞面目に一生懸命働いてるんだ。君のように、藝術だ、何だかんだといいながら、のらくら遊んでいる人間じゃないんだ。それに君にはわからないだろうが、おれの金には血がにじんでいるんだ」

「血がにじんでいる？」と彼女は皮肉な笑いをうかべた。

「そうだよ」と私は斷乎として答えた。

全く血がにじんでいるということには實感があつたのだ。しかし私は、夜の祕密にはふれることはできなかった。で私はふたたび繰り返すより仕方がなかった。

「つまり眞面目に働いて得た金なんだ」

「眞面目に働いたつて、こんな店で何になるの？」と彼女はいつた。

「君には、そんなこという権利はないよ」

數枝は、二つに折つた封筒を無意味にひらいて見た。

「そうね」と彼女は、話題でもかえるように軽く受け流した、「わたし、コーヒー飲もうかしら」

「もう三十分たたないと出来やしないよ」

次の瞬間、數枝は、はつとしたように入口の方を見た。外光を背に負うようにして一人の女が入つて來たからだつた。最近ときどき飲みに來る植田敬子という四十すぎの未亡人であつた。彼女は、數枝を見ると、とまどつたようにカウンターの端にたたずんだ。私は、愛想よくいつた。

「植田さん、いま、店をあげたばかりなんですが」

「そうらしいわね」と彼女は遠慮した聲でいつた、「でも、こんなに早く店をあげているとは知らなかつたわ」

「晝間は、十一時から一應喫茶をやることになっているんですよ」

「そう」と敬子は氣にもとめない聲で答えた、「あのね、岩本さんが、今日、わたしへ繪をもつて來て下さるというのよ。それでね、受取つておいてほしいのよ」

「岩本さんですね」